

鳥取藩領時代の曾根村

近世初期、高砂市域の曾根村は鳥取藩領地だったことがあり、それに関する史料が鳥取県立博物館にあります。正確にいうと、曾根村は寛永十七年（一六四〇）年に御家騒動により領地を没収の上、鳥取藩預けとなった旧宍粟藩主池田輝澄に幕府が与えた「堪忍料」の内です。寛文二年（一六六二）には輝澄が没して子供の政直が福本藩主となり、曾根村も同藩に属したので、鳥取藩の支配は二十年余りのこととです。

鳥取藩資料の『万留帳』などから、鳥取藩時代の曾根村について紹介しましょう。まず輝澄の「堪忍料」は一万石ありましたが、ほとんどは播州神西・神東郡（現市川町・神崎町・大河内町）の村々で、印南郡曾根村だけぽつんと離れているのが注目されます。これは偶然ではなく、曾根村の海に近いという地の利を幕府が配慮した上のことではないかと思えます。またこの村

は村高一二七九石余、鳥取藩領の他にも幕領などがあつた大村で、製塩や廻船業により栄えていました。当時、曾根村の船が、阿波国で薪を買い和歌山で売るといった広域的な商売をしていたことがわかる記事もあります。鳥取藩は曾根村に蔵と御茶屋を置いて、御蔵奉行を駐在させていました。秋には代官二人を派遣し、播磨領の年貢米を曾根の蔵に納め、飾磨津から大坂の蔵屋敷へ廻送して売却しました。藩にとって、播州飛地は貴重な現金収入源だったので。

（高砂市史編さん専門委員

中川 すがね）



筆 田能村直入  
「曾根八景 日笠観月」